

語



かとう かつお 1947年盛岡市生まれ。東大法学部卒。出版勤務を経て一橋大社会学部教授、同大大学院教授。2010年から同大名誉教授。専門は政治学、現代史。著書に「ゾルゲ事件」(パンテミックの政治学) など多数。インターネット上で「ネチン・カレッジ」(http://netizen.html.xdomain.jp/home.html) を主宰中。

第二次世界大戦時にリヒャルト・ゾルゲや尾崎秀実らのスパイ組織が日本の機密情報をソ連に流した「ゾルゲ事件」が1942年5月に発表(実際の摘発は41年10月)されてから80年。今も謎に包まれた部分が多い事件の実像に迫ろうと、専門家らが「尾崎ゾルゲ研究会」を年内に発足させることになった。研究会の代表となる加藤哲郎・一橋大名誉教授(67)にその狙いや意義について聞いた。

— 新たな研究会をつくる経緯を教えてください。

ゾルゲ事件については97年に来た「日露歴史研究センター」が研究に取り組み、会報の運営50号刊行や国際シンポジウムを世界各地で10回以上開催するなど成果をあげてきましたが、会員の高齢化で2018年に解散しました。事件に関する新たな資料が国内外で近年見つかったこともあり、センターのこれまでの活動を受け継ぎ、さらに国際的なネットワークをつくって尾崎、ゾルゲの研究を発展させようというものです。昨年11月に東京で研究会の設立準備会を開き、今年11月に正式発足する運びです。

— 最近のゾルゲ事件研究で注目されることは。

まず、当時思想犯の取り締まりを担当していた検事、太田耐浩が残した文書の公表(17年に関係者が国立国会図書館に寄贈)が挙げられます。ゾルゲらは南進優先の国策を決めた41年7月の御前会議の内容などを入手しました。重大な情報漏洩事件にあたるのは確かですが、太田文書によると、司法省・検察当局はむしろゾルゲが近衛文麿内閣のブレインだった尾崎や西園寺公一、犬養健らを利用して日本のソ連攻撃を防ぐため南進論を誘導させようとしたことを問題視し、昭和天皇にも上奏していました。従来、研究は特高警察の調査記録を基にしていましたが、司法検察側の太田文書から事件の異なる捉え方が見えてきました。

— 外国でも研究が進んでいる

等身大のゾルゲ 解明へ

ねそ かつお

特高警察はゾルゲがソ連に送った電報を400件程度とみなし、うち約200件が確認されていました。これに対し、元駐日ロシア大使館員のアンドレイ・フェュン氏が19年にロシアで刊行した資料集によると、ゾルゲの電報と手紙は来日前の上海時代を含め約650件で日本側の想定を大きく上回ることが分かりました。電報はソ連中枢とのレベルまで伝わったのかや内容の情報評価が分かる貴重な資料になっています。ロシアでは最近ゾルゲの研究が盛ん出され、テレビドラマ化されるなどブームになっています。ただロシアのゾルゲ研究は、大祖国戦争(ロシアでの第二次大戦の呼称)の勝利に貢献した愛国主義的な軍事情報活動としての評価が根強くあります。

このほかドイツでは、ドイツ紙特派員として来日したゾルゲがドイツで発表した論文や新聞記事231本のリストが新たに作成されました。中国でもゾルゲが上海時代に周恩来と接触していた史実が明らかになっています。

— ゾルゲ事件をめぐる情報戦を指摘されていますね。

ゾルゲ事件を「赤色スパイ



モスクワ市内にあるゾルゲの像。1986年に建立された。近くにゾルゲ通り、ゾルゲ博物館があり、2016年には鉄道ゾルゲ駅ができた。

インテリジェンスや情報戦に現代的意義

「20世紀のスパイマスター」というゾルゲ像は政治的に作られたものです。例えば大きな成果とされる独ソ開戦に関する情報は、ドイツにいたスパイなどからもソ連にもたらされていました。事件の基本資料がそろってきたのをきまへ、戦後につられたゾルゲ像や俗説をリセットし、等身大のゾルゲを解明していく必要があります。そのためにもジャーナリスト、知識人としてのゾルゲを見ることも欠かせません。尾崎についても同様です。ゾルゲ事件研究はインテリジェンスや情報戦という現代的意義があり、できるだけ若い世代の人たちが研究に加わってほしいと考えています。

— 今後のゾルゲ研究に求められるものは。

「20世紀のスパイマスター」というゾルゲ像は政治的に作られたものです。例えば大きな成果とされる独ソ開戦に関する情報は、ドイツにいたスパイなどからもソ連にもたらされていました。事件の基本資料がそろってきたのをきまへ、戦後につられたゾルゲ像や俗説をリセットし、等身大のゾルゲを解明していく必要があります。そのためにもジャーナリスト、知識人としてのゾルゲを見ることも欠かせません。尾崎についても同様です。ゾルゲ事件研究はインテリジェンスや情報戦という現代的意義があり、できるだけ若い世代の人たちが研究に加わってほしいと考えています。

【聞き手・田中洋之写真も】

年内発足「尾崎＝ゾルゲ研究会」代表の一橋大名誉教授 加藤哲郎さん

記者のひとこと

東京・多摩霊園にあるゾルゲの墓が揺れている。ロシアのラブロフ外相が1月26日、遺骨をクリル諸島南部、つまり北方領土に埋葬し直す構想があると表明したのだ。1944年に処刑されたゾルゲの墓は内縁の妻だった石井花子さんが設けた。年月を経て、その相続人は維持管理が難しくなるとして墓所の使用権を在日ロシア大使館に承継することで最近合意していた。その矢先の改葬案は、英雄の遺骨を帰還させ手厚く顕彰したいということなのだろうか。ロシア側の真意は不明だが、北方領土を持ち出すところに情報戦の一端がうかがえる。